「万里緒の太陽」

文・大塚角満

麓ノ石に万里緒（まりお）消防士がいた。ふつうの消防士じゃない。身長は185センチ、体重は90キロの筋肉質。胸板の厚さは、ドラム缶ほどもあるという。

高圧ポンプを背負って火災現場の駆け回る機動消防部隊の一員だ。消防士に必要とされる機動力だけでいえば、万里緒は、まさに火災現場にいてはならない存在になっている。そんな花形の職場に配属されたことを、ご本人が一番喜んだ。

代々、消防士の家系のかた。いわゆる、俺の父、真利男はしがない町医者、一応、ドクター真利男、って言われた患者には悪いが、万里緒が生まれただけで、じいさんはじんぶんも、父親も、消防署の署長だった。

万里緒の、大きな筋肉のルーツは、父親の遺伝子にあるのだろう。

「万里緒は、ここに機動消防隊の1号を始める！」

起床は朝の5時。冬場なんて、まだ暗い時間だ。

「万里緒、消防士だ、これも修業って思うんだぞ！」

代々、俺の家の